のか。なぜ世は乱れ、飢えに苦しむ人が増え、戦が起こるのか。

なぜ、なぜ、なぜ。

ねえ、花。

君は確かにボクの師匠だった。君がボクを導いてくれた。君のおかげでボクは世界を知った。初めてこの目で世界を見た。

君が教えてくれたのは、それだけじゃない。

二人で見た星空。輝く水面。草原に揺れる花々。青空を背景に微笑む花。

それから悩む花を見た。涙を流す姿も。戦の跡でたたずむ姿を。

そして君に恋をした。

君を失くし、探し続け、やっと再び君に出会った時には、その想いはかなうことはないと知った。その痛みですら、今はもうボクの一部だ。

君との出会いの全てが今のボクを形作っている。君がいなければ今のボクはいない。

だから今度は君を導くのはボクの役目だと、そう思ったんだ。

＊

花は船の縁に捕まり、辺りを見渡した。仲謀軍と同盟を結ぶための使者として、柴桑へ向かうところだ。

長江――。

「本当に広いなあ」

テレビや写真では見たことがあるけれど、実際に長江を見るのは初めてだった。花が目にしていた川とは全く違っている。川岸は遠くかすかに見え、川の流れに乗りいくつもの船が行き交う。これでも最近の世情のせいで船の数は少ないのだという。

「でも仲謀軍も孟徳軍もいるからね。大軍では色々と需要も発生するから、商船や漁船の行き交いが途絶えることはない」

隣に立つ孔明が花の視線に気づき、説明をしてくれた。

「長江がそんなに珍しい？」

「はい。私の故郷にはこんなに広い川はなかったので」

「下流はもっと広いし、北にはもう一つ大きな川があるんだよ」

中国を流れる二つの大河。聞き覚えはある。社会科でも勉強した気がする。

「えーと、黄河、ですか？」

「そうだよ。見たことはある？」

「いいえ、一度見てみたいです。本当に黄色いんですか？」

「うん。北の黄色い大地の土を溶かしているからね」